愛光NEWS
2023年11月

2023（令和5）年12月20日発行
（編集）愛光本部企画室
（TEL）043－484－6391
（メール）https://www.rc-aikoh.or.jp/

11月9日（水）、法人権利擁護研修が開催され、実習生を含めて５１名が参加し、用意された2つの議題についてグループディスカッションが行われ、活発な意見交換が行われました。

研修の最後に、滑川監事より「権利擁護支援の考え方」について講義をいただき、権利擁護支援の重要さ、愚行権の大切さを改めて考える機会となり、実りある研修となりました。

□事業経過など（2023.11.1～）

月/日(曜)	記　　事
11／1(水)	広報委員会/地域食堂委員会/メンター委員会/採用試験
2(木)	本部実績会議/スタッフ会議/中計打ち合わせ
6(月)	嚥下研修/研修委員会
7(火)	業務執行会議
8(水)	コ・ヒューマントレーニング/採用試験
9(火)	法人権利擁護研修/ｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
10(金)	後援会運営委員会
13(月)	嚥下研修
14(火)	業務執行会議/防災委員会/感染症対策委員会/千葉県社会福祉大会
15(水)	地域食堂ともいき（お弁当販売）/リスクマネジメント研修
16(木)	リスクマネジメント委員会
17(金)	ボランティア委員会
20(月)	嚥下研修
21(火)	佐倉圏域事業部実績会議
22(水)	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/財務ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ メンター情報交換会
23(木)	高齢者福祉事業部実績会議/はちす苑経営改善ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ
24(金)	職場改善委員会/経営戦略会議
25(土)	理事会
27(月)	嚥下研修
28(火)	コンプライアンス委員会

■おもな出来事

□理事会

11 月 25 日、理事会が開催されました。「2023（令和 5）年度第 1 次補正予算」について、法人資産の資金運用について、諸規程の改正について承認されました。また、業務執行理事からの報告、各事業部からの報告、上半期決算について報告が行われました。

■月報から

□食事懇談会（ルミエール）

11 月の家族会は食事懇談会をテーマとして利用者の給食を味わってから食事について懇談する形をとって行った。家族が 30 名以上参加されたのでおひさまを借りてゆっくりと昼食を食べていただいた。当日の献立が胚芽米、カレイの煮つけ、筑前煮、うの花、沢煮椀と和食 100%の内容であった。　昼食後懇談会がはじまり今回は栄養士にも参加を依頼し家族と食事について遠慮のない意見交換を行うことできた。給食の内容については、とてもおいしかったという意見が大多数を占めて、味つけや食べやすさ等高い評価をいただいた。質問で一番多かったのが物価高騰による、安定したおいしい食事の提供を維持できるかの心配であった。栄養士より食材費の高騰、特に昨年は卵が値上がりし提供できなかった時期があったことを報告、給食業者と協力してなんとかやりくりしていることを説明しご理解をいただいたが、ほとんどの家族が利用者においしい食事をいっぱい食べてもらいたい気持ちが強く、食材を寄付したい等温かい意見もいただいた。これからも「食」については課題があるが利用者においしい食事を提供できるよう施設としてもできることは取り組んでいきたい。

（ルミエール課長　原　宏之）

□物井駅の花壇（リホープ）

15 日　園芸班の活動の一環として、千葉敬愛短期大学の阿部准教授のゼミの学生と一緒に物井駅の花壇に花植えを行った。昨年に引き続き、2 度目の交流。阿部准教授と学生 7 名、リホープ利用者は園芸班の 6 名が参加した。利用者がポットを渡し、学生さんが植えるという共同作業で物井駅の花壇を整備した。学生に元気に声をかけてもらい、会話も弾んだ。「花の話がいっぱいできて嬉しかった」と声を弾ませていた。別れ際には寂しくなってしまい、涙を浮かべる姿も。また来年も一緒に作業できることを楽しみにしている。

（リホープ課長　稲垣　直子）

□めいわからルミエールへ（めいわ）

これまで一人で歩いて生活していた利用者が今年 3 月に左大腿部頚部を骨折した。医師から手術は難しいと言われ、骨折のまま温存することになった。以降、移動を伴う動作は全介助となり日中は車いすで過ごしていた。本人の生活が大きく変わったため、職員は本人ができるだけ快適に過ごせるよう、介助方法や環境の整理、ご本人のメンタルケアに懸命に取り組み、その甲斐あって、本人も穏やかに過ごせるようになってきていた。一方で、日中活動への参加は元々難しい部分はあったが、骨折後より動きに制限が生じ、さらに難しくなっていた。

住み慣れためいわで暮らす方がよいか、もしくは、めいわよりも、より重度の身体介護に特化したルミエールの方がよいか、生活環境を含め将来的なご本人のニーズ、暮らしの場について検討し進めることとなった。ご本人に説明し、10 月下旬からルミエールに何度も体験をしてもらった。ルミエールで過ごす様子を確認し、ご家族にも承諾いただき、最終的には 12 月からルミエールで生活することが決まった。長年めいわで一緒に過ごした月日を思うと複雑な思いもあるが、これから新たな場所でもっと楽しく過ごしてもらえることを願っている。

（めいわ課長　中田　憲一郎）

□目標達成（根郷通所センター）

木工商品の販売を開始し、目標として掲げたスウェーデントーチ 40 本、一輪挿し 20 本を達成！それを祝し丸太型のケーキを注文し、皆でお楽しみ会を行うことになりました。『仕事に精を出し楽しむときは大いに楽しむ！』　やっぱりメリハリは大切です！

（めいわ通所部所長　菊地　暁生）

□久しぶりの連絡（よもぎの園）

昨年度、他法人から紹介していただき取引を始めた業者から久しぶりに連絡があった。この業者とは数回取引をおこなっていたが、先方と取引先の問題で事実上取引終了となっていた。そんな折、先方が別業者との取引を再開したようで、よもぎの園に再度連絡をくれる形であった。早速、話を聞きに先方に出向くとすでに商品は用意されており、請け負うこと前提に話を聞くことになってしまった。

前回までいただいていた作業はいわゆる「内職」であったが、今回の商品はよもぎの園でも実際におこなっているＥＣサイト用の作業内容であった。内容的には、ダンボール内の商品にバーコードシールを貼付し再度ダンボールに戻すだけであり特に問題なく受け入れることができるものであった。担当職員もその場で受け入れたいとの意思があったため急ではあったが取引を再開することとした。

ＥＣサイト用の作業打診はここの所、目立ち始めてきている。生産時の商品ロスもほぼ出ないため事業所としてもありがたいところである。アフターコロナ社会の新しい形が出来てきているのかな？と感じるところであるが、Ｂ型事業所としても売り上げ維持向上を常に心がけながら、このような変化に敏感でありたいと思う。

（佐倉市よもぎの園主任　近藤　真一）

□「オープンダイアローグ」　研修に参加して（ワークショップかぶらぎ）

11 月 29 日（水）千葉県教育会館にて精神科医の森川すいめい氏による「オープンダイアローグの可能性」と題した講演を聴いた。オープンダイアローグは日本においては 2010 年代後半にフィンランドの実践として紹介され“精神科医が(投薬治療の枠を超えて)対話の効果に注目し始めた”と興味をもっていた。

今回このオープンダイアローグのトレーナー資格を持つ森川医師が具体的な現場での実際のやりとりを示す形で紹介してくれた。その中で、実際には対話に入る前段に参加者間である認識を共有してから進めるというルールがあることを知った。それは『他者とは常に自分の想像を超えた存在である』というものであった。以前ある心理士が語っていた言葉を思い出した。彼が「心理学的アプローチとは簡単に言えば自己と他者が別々の存在だと理解していく過程に寄り添うことだ。」と言ったことに似ていると感じたからだ。ただお互いの意見交換に留まるのではなく、根底に自己と他者を明確にしながら現状の捉え直しを繰り返すことで、家族や関係者とのディスコミュニケーション状態が改善され、その結果症状が快方に向かう…。技法、手法は様々だが人の心の平穏に必要なものは根底では同じものを取り戻す過程なのではないか。

（ワークショップかぶらぎ主任　宮部　和樹）

□誕生会（ジョーの家）

入居者 1 名の誕生会をおこなった。普段の食事では、それぞれ自分の時間帯で食事を摂っているが、誕生会の日は 4 名揃って食事を行った。誕生者からのリクエストはなかったが、世話人が普段の食事メニューには提供されないローストビーフをメインとした洋食メニューを作ってくれた。普段は個々の食事であるが、4 人揃ってテーブルを囲んだ食事は、いつも以上においしく感じられたと想像された。

（ジョーの家　高橋　健）

□朝の生活（山王の家）

山王の家では男性、女性の利用者が生活されている。朝は男性利用者が早くから動き始める。6 時起床となっているものの、その前から起きて朝食が出来るのを待ち、食べ終わると各々出掛ける準備を始め身支度を整え早目にテレビ前で待機する。その頃になると女性利用者が朝食を取り始める。時計とテレビを見続けて時間になるとおもむろに立ち上がり、リュックを背負い出発・・・。

朝の利用者支援は様々あった。職員の急な体調不良により初めて宿直業務をする事になったが、話に聞くのと実際に見るのとは違い、利用者の様子を知る良い機会となった。

第二の自宅として家庭的な雰囲気を大切にしているが、自分で出来る事が増えたり、新たな関心や興味が出て自己の気付きに繋がったりと、家族と離れ、仲間と一緒に生活する事で互いに良い影響を与えあえればと感じた朝のひとときだった。

（山王の家管理者　岡本　綾子）

□最後まで　デイサービスで過ごして、楽しみたい！（はちす苑）

令和 4 年 3 月より利用を始めた、男性の利用者様が、令和 5 年 5 月下旬、主治医より「老衰による体力低下」と診断される。

奥様より「自宅で看取る覚悟はできている。何があってもおかしくない状況も分かっている。でも、最期まで楽しい思いをしてほしい」と、強いご意向から、サービス担当者会議を開き、「看取り介護計画書」を作成しデイサービスを継続。いつも通り入浴し、食事摂取量も数口程度となってきていたが、多くの職員から声を掛けられては、それに対して手を挙げて応えられ、コミュニケーションを楽しまれているご様子であった。

最後となってしまった通所時には、朝から活気なく、食事も水分も摂ることができず、呼吸も苦しそうな様子であったが、本人の希望で大好きなお風呂に入り、ベッドで休み、帰り際には目を開けて職員の手を握り返されていた。その 3 日後の早朝、ご自宅にてご逝去された。数週間後、奥様が来苑され「最期までおじいさんの大好きなはちす苑に通えて本当に、本当に良かった。皆様に大変お世話になりました。お父さんも幸せです」と感謝のお言葉をいただいた。

特養においては 120 人以上の看取り経験はあるが、デイサービスで今回のような看取り状態の方を受け入れたのは、ほぼ初めてではないかと思う。職員のほとんどが、看取り期の方を受け入れたのは、初めてであったため、体制は整えていたものの、怖さや戸惑いなどあったと思う。しかし、今回の経験が大きな糧になることは間違いない。「ご本人の思いに応える」を大切に、今後も同様のケース、ご要望があった場合は、積極的に受けてもらえるよう成長を期待したい。

（はちす苑　苑長　麻生　知明）

□ゆりかごタイム（乳児親子対象）　同窓会スペシャル 2023

（佐倉市南部児童センター）

最近、乳児親子の利用者は、育児休業中のママが増えている。１歳のお誕生月で、「ゆりかごタイム」は卒業になる。同時期に、仕事復帰をする方も増えている。仕事復帰後は、児童センターに来館する機会が少なくなってくる。仕事と育児の両立。せっかく出来た友人関係も、交流する機会が少なくなり、寂しいと感じるとの声も聞かれた。そこで、現役の「ゆりかごタイム」利用者の方々と、卒業した幼児親子の皆さんが交流する「ゆりかごタイム同窓会スペシャル 2023」を企画し、去る１１月１７日（日）に開催した。今回、初の企画事業である。休日は、家族でレジャーを楽しむ機会が多いためか、イベントへの参加者が少ない傾向にあったが、予測に反して、なんと８０名近くの申し込みがあった。しかも、驚くことに半数以上が夫婦での参加。手あそびやハイハイレースなど、夫婦で真剣に取り組む姿がとても微笑ましく、日頃から積極的に育児にかかわるパパの姿が伺えた。パパ同志で歓談する場面もあり、みんなで楽しんでいる様子だった。今回の企画が、新たな交友関係の広がりにつながっていけばと思う。利用者のニーズは、日々変化している。当事者の声に耳を傾け、気持ちに寄り添いながら、企画も柔軟に対応していく必要があると感じた。

（南部児童センターインストラクター　吉田　知加子）

□挑戦する気持ち（学童保育所）

４年生の子どもたちからダブルタッチを跳んでみたいという話しがあった。回し方も跳び方も分からない状態からのスタートだったが職員が調べ、やり方を伝えるとすぐにその日の外遊びから実践していった。１回も跳べずに、何度も縄が体に当たるが、それでも外遊びの時間終了まで跳び続ける姿を見て、他の子どもたちも次々と参加し始めた。縄に入るタイミングを試行錯誤し、１回跳べるようになると拍手が挙がった。何日も繰り返し、今では１５回も跳べるようになった。日々の遊びの中で挑戦する気持ちを学んでいる子どもたち。遊びの重要性を改めて感じた。（第二根郷学童の報告から）

（学童保育所主任　齋藤　理江）

□毎年恒例！順天堂大学学生企画　としとらん塾開催（総合相談センター）

11 月は 4 週に渡り、としとらん塾を開催した。昨年に引き続き、今年も順天堂大学スポーツ健康科学部の松山毅先生ゼミの学生に講師を依頼し、介護予防に関する講話や運動を中心に実施した。学生とは昨年を振り返りながら事前に打ち合わせを行った。今年は２コースに分け、実施場所を南部地域福祉センターと根郷公民館で行う事で、なるべく多くの方に参加いただけるように工夫した。参加者も学生も、最初はお互いに緊張している様子だったが、自己紹介を含めたアイスブレイクをきっかけに皆さんの笑顔が増え、更に風船バレーやボッチャを通して大変盛り上がった。また、介護予防の運動では正しいウォーキングやペットボトルを使った筋トレの方法、ボールやタオルを使ったストレッチなど、普段の生活の中で取り入れられる内容などを教えてもらった。参加者の皆さんへ学生からお手製のイラスト入り体操メニューをお土産としていただいた。多くの参加者からは「元気になった。来年もまた来たい」との感想。ぜひ来年もお互い笑顔で会えることを期待したい。

（総合相談センター所長　森　由美子）

□実りの秋・食欲の秋（南部地域福祉センター）

夏の花火大会や、佐倉の秋まつりも終わり、落ち葉舞う季節、日本各地で紅葉狩り、果物狩りなどの観光シーズンになりました。この佐倉市も、自然の多い環境のため、より季節の移り変わりの様子が目に映ります。

実りの秋といえば、南部地域福祉センターも、秋の果物や野菜を目にする機会が多くなりました。先日は、「フードバンク」の受付の際には、お野菜を提供してくれる農家が来館され、立派なサツマイモを沢山見せてくれる機会がありました。そうした食料をわざわざ運んでくれる農家の方と、物を託された私たち職員との触れ合いは、とても暖かなつながりのように感じます。

南部地域福祉センターのベランダには、市民より提供してくださった渋柿を、スタッフが干し柿として吊るしました。その景観は、秋の青空と柿のコントラストがとても綺麗で、来館者の目を楽しませています。干し柿は、いつになれば出来上がるのか、私にはわかりません。気長に待つしかなさそうです。

（南部地域福祉センター　青山　秀人）